

西南戦争の研究

別府大学史学研究会学生部会近現代史研究室

一 はじめに

われわれ近現代史研究室では、週に一回、『明治史要』の講読を行っています。『明治史要』とは、慶応三年（一八六七）一〇月一四日から明治一五年（一八八二年）二月三〇日に至る歴史事象を、編年式で編纂した詳細な年譜です。編纂の主な目的は、明治維新という大改革の際に、各所から集めた資料がバラバラになるのを阻止するため、又明治維新体制の淵源を明らかにする為に、その資料を整理し、修史館（現代の東京大学史料編纂所）が編纂、刊行したものです。昨年の学生研究発表会では、その『明治史要』を根本史料とし、「明治新体制と諸藩」と題して発表し、諸藩の処罰数、献金数の数量表等を作成いたしました。今年も引き続き『明治史要』を根本資料とし、西南戦争を取り上げる事といたしました。作業内容は、鹿児島・熊本・宮崎・大分の四県を室員四人でそれぞれ一県ずつ担当し、以後分担制として作業し、適宜集まって話し合い、まとめて行きました。

二 西南戦争の概要

まず初めに、西南戦争全体を把握して頂くため、簡単にその発生から終結迄を追っていこうと思います。明治一〇年二月

一四日鹿兒島県士族は武装して鹿兒島を出発、西郷隆盛も翌日の一五日に出発します。二日間鹿兒島を出発した人数は一万三〇〇〇にのぼっています。

進軍の目的は、西郷が熊本鎮台司令長官あてに出した「拙者儀、今般政府へ尋問ノ廉之有、明後十七日県下発程、陸軍少將桐野利秋、陸軍少將篠原国幹及旧兵隊ノ者共随行致候間、其台下通行ノ節ハ、兵隊整列、指揮ヲ可彼受、此段御照会ニ及候也」という書状に明らかです。

この史料では、「尋問ノ廉」を糺し、熊本を通過して東京を目指しているということが注目されます。「尋問ノ廉」というのは、中原尚雄という警官が西郷暗殺の命を受けていたというものです。この鹿兒島士族に呼応する形で、反政府士族も熊本隊・熊本協同隊などを結成してかけつけ、薩軍兵力は三万人にふくれ上がります。対する官軍は、一九日有栖川熾仁親王を征討総督に任命し、約四万の兵力を神戸から博多へ移動させ、二二日博多から南下します。一八日薩軍は、熊本の水俣に進軍し、二二日熊本鎮台がある熊本城の攻撃を開始しますが失敗、翌日の攻撃も失敗。こうした中で薩軍は「食料がなくなるのを待つ」という熊本城包囲策に作戦を変更し、約三〇〇〇名の包囲隊を残して北上。南下する官軍と薩軍は三月四日田原坂で激突。これに敗れた薩軍は四月一五日熊本城の包囲を解き、人吉へ退却。しかし六月一日人吉陥落。薩軍は宮崎方面へ転じますが、七月二四日都城、三一日宮崎、佐土原、八月一四日延岡が陥落。ついに八月一七日、宮崎県東臼築郡長井村で主力は降伏。西郷は官軍の包囲をかいくぐって脱出しますが、九月二四日鹿兒島の城山で、西郷・桐野らが自害して戦争は終結しました。

大分県下の戦いは、薩軍の別働隊が五月一〇日大分県に侵入、一三日から竹田を占領しますが二九日に陥落。その後薩軍は臼杵へ入りますが、六月一〇日に陥落。以後佐伯方面に転じます。官軍におされて八月中旬まで、宋太郎峠などでの山岳戦が続く事になります。

この戦争で動員された官軍兵力は五万八千五百八十八人、うち戦死者約六千八百八十人、戦傷者約九千二百八十人、薩軍兵力は約三万人、戦死者約五〇〇〇人、戦傷者一万人でした。最大規模で最後の士族の反乱となったことはいまでもありません。

続いて戦争の転機となった戦い、熊本城包囲策と田原坂の戦いについて詳しくみてみます。まず熊本城包囲策です。当時の熊本鎮台司令長官谷干城は、明治九年一〇月に起こった神風連の乱の熊本城襲撃の際の傷がまだいえていなかった事などを理由に、二月一四日籠城作戦を決心します。城内には約三五〇〇人の鎮台兵と福岡敬明熊本県権令などいきました。この様な中で問題となっていたのが食料です。一九日に天守閣が炎上するという事件が起こり、備蓄していた米五〇〇石が焼失してしまいます。すぐ米の買収策が取られましたが、次第に減少し、四月六日からは各隊とも粟飯とする事を決め、濠を干して鯉や鮒をすくい栄養としました。田原坂の戦いで薩軍が敗れ四月一五日に包囲が解かれる迄の約五〇日間、一人の逃亡者もありませんでした。続いては、田原坂の戦いです。この戦いは三月四〜二〇日迄一七日間の戦いで、西南戦争最大の激戦でした。その理由となったのは、当時田原坂は、熊本に通じ、かつ大砲や荷馬車も通過する事ができる唯一の道で、そこを何とか通過したい官軍と、それを阻止する薩軍がぶつかったためです。この戦いで、官軍は一日平均二三方発の弾丸を使いました。官軍の戦死者一六八七人、負傷者五〇〇〇人以上。薩軍もほぼ同数の犠牲者を出したと推定されており、この数字からも激戦の様子がわかります。

三 明治初期の鹿児島

なぜ、鹿児島が震源地となったかについて考えていきます。それには明治初期、特に廃藩置県のころまでさかのぼらねばなりません。政府は、四年七月一四日廃藩置県を断行します。これに対して、旧藩知事島津忠義の実父久光ひさみつは大きな不満を持っていました。この理由については久光が政府中央にいる大久保利通・西郷隆盛から疎外されがちだったこと、政府の進めている開明政策について批判的だった事などが挙げられます。この久光の反発に対して政府は、明治四年九月一〇日戊辰戦争のほうびとして旧鹿児島藩に与えられていた、賞典禄一〇万石のうち五万石を、久光個人に与えるという慰撫政策をとりますが、久光は態度を変えませんでした。更に政府は、明治六年一二月内閣顧問に命じたり、翌年四月二七日には左大臣という高位を

与えますが、久光は反対の態度を強めてしまいます。

土族の反乱、とくに西南戦争といえば、征韓論をめぐる政府の分裂から説き起こされますが、久光は西南戦争では中立を表明するものの、廃藩置県後の島津久光と政府の関係も見落としてはならないと思います。

続いて、西郷らが設立した私学校と、当時の鹿児島県権令(のち県令となる)大山綱良との関係について見ていきます。私学校は、鹿児島出身の軍人・文官で、西郷に従って辞職し帰国する者が数百名に及んだので、これらの青年をまとめて指導・教育するために、明治七年六月に設立された一種の軍事訓練機関で、結局、反政府・土族の温床となりました。篠原国幹が監督した銃隊学校と、村田新八が監督した砲隊学校の二つから成ります。西郷は、学校に対して形式的には何の名目も持っていないでしたが、事実上の中心人物で、生徒達の精神的支柱でした。私学校は、国家非常の際には身をもってあたるべき人材の養成を目的とされていたのです。つまり国家を担っていく志士の養成所でした。このような私学校に対して大山綱良県令は、積極的に協力します。私学校の経費を県庁の金から支出し、県内各地の区長・副区長などのポストに私学校関係者を採用し、又警察官にも私学校派が多く採用されました。これにより県下の行政・警察権は、私学校が握るようになります。また大山県令は、西南戦争の際に県庁の公金一五万円を薩軍に提供します。薩軍の軍資金総額は七〇万円と言われているので、この一五万円が大きな額だったことが分かります。以上の事から、大山県令と私学校の緊密ぶりがかがえます。

次に廃刀令と秩禄処分について見ます。政府は明治九年三月に廃刀令を出します。刀は武士の魂といえるもので、土族にとっては大きな屈辱でした。続いて土族におい立ちをかけるように秩禄処分の決定がなされます。これに反発した土族が神風連の乱、秋月の乱、萩の乱をたて続けに起こしましたが、いずれも規模が小さかったため、政府に鎮圧されてしまいます。一方鹿児島では、県の要職は私学校派で固められており、大山県令も土族の生活に及ぼす影響を最小限度おさえる方針をとっていたため、廃刀令には従わず、秩禄処分にも地租改正にも従いませんでした。秩禄処分が本格的に行われたのは西南戦争が終わった後で、明治一年の秋に至ってようやく完成しました。

以上のような事から、鹿児島が震源地となった理由は、そもそも島津久光問題が根底にあります。これで政府との間に溝ができ、鹿児島が半独立国家的な雰囲気をおびるようになった事がそもそもの発端です。この半独立国家的な雰囲気から半独立国家の確立へと変わったのは明治九年頃と考えられます。この変化を大きく手助けしたのが、私学校の存在と大山県令との密接ぶりでした。前にも述べましたが、県の変更職に私学校派を次々と雇い入れ、県庁や警察など県の行政機構を反政府の拠点へと変えた事が大きな要因でした。政府の密偵事件や火薬庫襲撃で怒りが爆発し、以後西南戦争へとつき進んでいったと考えます。

四 西南戦争への対応

ここでは、西南戦争に参加した土族の割合と参加した理由について考えます。第1表は各県の男性土族の西南戦争への参加の割合を示したものです。大分県では五・二八%となります。熊本県五・二八%、宮崎県一八・二〇%、鹿児島では二二・〇六%。このような数字から、西南戦争は最大の土族の反乱といわれますが薩軍通過地域ですら、実際はごく一部の土族しか参加していません。もちろん、日本全国にいる土族層との連携はありませんでした。

続いて、各県の土族が参加した理由を述べます。まず、鹿児島に次いで割合の高かった宮崎県です。宮崎県は明治九年鹿児島県と併合していたので、西南戦争勃発の明治一〇年には、宮崎県は存在していません。このような中で参加理由は、①鹿児島県併合による同郷意識 ②宮崎支庁の県官が区長・戸長という行政機構を通して出兵を勧めたため ③他の旧藩領に遅れをとるまいとする対抗意識などが挙げられます。続いて熊本県の熊本隊・竜口隊・人吉隊は、君側の奸を取り除くため、つまり有司専制を排除するために薩軍に加担しました。協同隊の場合は、自由民権派の民権党が基礎にあり、民権を拡張する事を目標として、これを達成するためには主義は違わなくてもまず西郷に加担し、政府を倒すために参加しました。最後に大分県での参加理由も、協同隊ほどの長期構想は不明ですが、対外危機の中での国威発揚、それを阻害する君側の奸の排除という点は共通しています。

第1表 各県別参加士族の割合

※ は各県における士族総数である。
この数は明治7年内務省戸籍表による。

(単位：人)

熊本県

熊本隊 1,500
熊本協同隊 400
竜口隊 50
人吉隊 550
合計 2,500

宮崎県

延岡隊 1,400
高鍋隊 1,200
飫肥隊 1,300
佐土原隊 1,300
都城隊 1,580
合計 6,780

$$2,500 \div \boxed{47,363} = 0.05278\dots$$

$$= 5.28\%$$

$$6,780 \div \boxed{37,245} = 0.18203\dots$$

$$= 18.20\%$$

大分県

中津隊 150
報国隊 600
合計 750

鹿児島県

私学校 13,000
徴募隊 10,000
合計 23,000

$$750 \div \boxed{14,205} = 0.05279\dots$$

$$= 5.28\%$$

$$23,000 \div \boxed{104,284} = 0.22055\dots$$

$$= 22.06\%$$

熊本県 5.28%
宮崎県 18.20%
大分県 5.28%
鹿児島県 22.06%

続いて戦争に参加した民権家宮崎八郎と増田宋太郎について述べます。まず宮崎八郎は、当初は民権家ではなく、征韓の実行を政府に迫るほどの国権家でありましたが、しだいに民権家に転身し、明治八年四月には植木学校を設立。この学校には、自由民権思想のめざめはじめた士族や豪農層が結集し、民権結社として活動を展開します。西南戦争が始まると、彼は熊本協同隊を結成して、主義は異なりますが西郷と共に政府を倒し、その上で西郷と主義の戦争をするという理由で薩軍に身を投じました。

次いで、増田宋太郎です。彼は福澤諭吉の従兄弟ですが、『田舎新聞』という自由民権新聞を発行していました。民権論と国権論をあわせ持ち、思想も行動もかなりの振幅がありますが、中津支庁・大分県庁を襲って西郷軍に投じます。西南戦争勃発前に三度も鹿児島に赴き、共鳴するものを持っていたようです。

一方、このような西南戦争に対して農民層は、どのような態度をとっていたのでしょうか。熊本・大分で起こった農民一揆を取り上げて考えてみます。戦争が起こった当初、熊本県下のほとんどの地域と、大分県の宇佐・国東・下毛・速見の四郡で一揆が起こりました。熊本で三万人、大分で二万人が一揆に参加しました。この一揆は、西南戦争と同時期に起こっていますが、薩軍との直接的な連携はありませんでした。同じ相手を敵にしているにも関わらず、手を結ばなかったのです。農民たちは西南戦争に対しては、一線を画した態度をとっていました。連携がなかった理由は、農民は士族への妬み、士族は農民に対しての蔑視感が存在していたからだと考えられます。

五 薩軍と官軍の戦力

続いて薩軍敗北の直接的要因として、薩軍と官軍の武器・服装・情報網の差について述べます。初めに武器についてです。薩軍が使ったエンピール銃と官軍が使ったスナイドル銃を比べると、形的には差はありませんが、性能に大きな差があります。薩軍が使用したエンピール銃は、一分間に一発しか撃てず、雨に弱いという弱点を持っていました。対する官軍が使用したス

ナイドル銃は、一分間に六発、実に薩軍の六倍の速さで撃つことができました。以下、弾薬・消費弾薬数の差、軍艦の有無等々、あらゆる武器において官軍が薩軍を上回っていました。

続いて服装の差がありますが、薩軍の服装は統一されていない木綿の着物、足には草鞋です。官軍は水に強いラシヤという毛織物で作られた軍服で、足には革の靴でした。田原坂の戦いを例にあげ具体的にみていきます。「雨は降る降るじんばはぬれる、越すに越されぬ田原坂」という民謡があります。この民謡から分かるように、田原坂の戦いでは大半は雨でした。そうした中で、薩軍の着物は水を吸い重くなり動きがとれず、わらじは雨と泥の中でプツプツと切れ、エンピール銃は粉火薬がしめり、不発になってしまいます。官軍は雨に強い服装でした。

最後に情報網・通信手段の差についてです。ここでは政府側の通信手段であった電信を取り挙げます。東京―長崎間の電信線は、明治六年二月に完成しました。同年四月二十九日には長崎電信局が開局、続いて一〇月一日小倉・福岡・佐賀の各電信局が開局しました。次いで八年三月に佐賀から、久留米を経て熊本に至る電信線が完成し、三月二〇日熊本電信局、七月一日久留米電信局が開局。戦争勃発前に、熊本迄電信網が延長されていた事になります。このような電信線を、政府は有力な武器として使い、西南戦争が起きる前から私学校の不穏な動きを、この電信によって情報収集していました。開戦と同時に、官軍は通信部隊を編成し、電信の運営にあたらせました。戦況報告、地方から中央への報告・要望、中央から地方への指令・伝達など、ほとんど全て電信に頼りました。この他にも手旗・ラッパ・のろしなどが併用されました。対する薩軍は、人送りか、せいぜい騎馬によるもので、電信とは比較にならず、戦局の見通しや、状況に応じた作戦はとれませんでした。以上、武器・服装・情報網の差から西南戦争の勝敗を考えましたが、どれをとっても、あきらかに官軍の方が薩軍を大きく上回っていたのです。

六 西南戦争の影響

ここでは西南戦争の影響として、経済・処罰・自由民権運動について述べます。まず経済です。西南戦争後、戦費調達のために、不換紙幣が濫発された事により、インフレが発生し、更には国家財政は西南戦争の軍備費のために赤字財政となり、経済は危機的状況に陥ります。当時大蔵卿であった大隈重信が不換紙幣の消却を計画しましたが、明治一四年の政変により下野したため、計画は実行されませんでした。その後大蔵卿に就任した松方正義は、インフレ対策として、不換紙幣の消却に取組み、また、財政面では、軍事費を除いたすべての部門で予算の削減に取り組みました。

これらの政策を実施しているさなか、軍備拡張要求に答えるために租税増徴をしたため、デフレーションが起り、その結果、農民所得が低下し、多くの農民が土地を手放し自作農が小作農に転落し、寄生地主制の形成を促進させる結果となりました。

続いて処罰についてみてみます。西南戦争終結後二七六四名が処罰されています。この中には県庁公金を薩軍に提供した大山綱良も入っています。大山は三月一二日、官軍に連行されて鹿児島を出発し、一七日には県令の官位を剝奪され、東京に送られます。ここで臨時の裁判所を開いて取調べを受け、五月二九日長崎にあった九州臨時裁判所へ送られ、九月三十日斬首刑に処せられました。

また西南戦争により、自由民権運動の担い手も大きく変わりました。明治初期の反政府運動や政治闘争は士族中心のものでしたが、士族を中心とした薩軍の敗北により、運動の担い手が豪農層へと移り、運動自体も武力によるものから言論や演説へと移り変わっていきます。

ここで全体のまとめをおきます。西南戦争の中心となった鹿児島士族は、幕末における倒幕の担い手であり、明治維新政権の功労者の自負がありました。ところが「有司専制」によって彼らは疎外され、期待は大きく裏切られる形となっていました。

いました。彼らは「有司専制」に大きな怒りを持ちました。話は飛びますが、鹿児島では約二〇年前に大久保利通の銅像が立てられています。明治維新政権の中心であるはずの大久保が、西南戦争後約一〇〇年間は顕彰されないので、この二〇年前にようやく銅像が造られたのです。いかに「有司専制」を憎んでいたかをかいま見ることができません。

このことから、鹿児島県士族には「有司専制」による政治からの疎外への反発がとりわけ強く、だから政府には従わず、鹿児島で理想とする国家を作ろうとします。その過程で起こったのが、西南戦争であったといえるのではないのでしょうか。ここに、他の士族の反乱との違いがあると思います。

最後に、作業を進めて行く過程で、数字の違いに多く出会われました。例えば薩軍の軍資金七〇万円と申上げましたが、一〇〇万円とする文献もあり、戦死者の数も薩軍五〇〇〇人と申上げましたが、田原坂の慰霊碑には六一八五人とあります。今回は『国史大辞典』に従いましたが、これからはそのような違いが何故生じたのか、それにはどのような根拠があるのか、未解決の事項が少なくありません。今後の課題と致します。

基本資料

東京大学出版会 『明治史要』一九六六

参考文献

横山浩一・蒔田保編『九州と日本社会の形成』 吉川弘文館一九八七

松尾正人『廃藩置県の研究』 吉川弘文館二〇〇一

大久保利謙『明治維新と九州』 平凡社一九七三

国史大辞典編纂委員会編『国史大辞典』 第八卷 吉川弘文館一九八七

国史大辞典編纂委員会編『国史大辞典』 第一三卷 吉川弘文館一九九二

黒龍会編『薩南記伝』 原書房一九六九

高野和人『西南戦争戦袍日記』 青潮社一九八九

『鹿児島県史第三巻』 鹿児島県一九八〇

『熊本県史近代編第1』 熊本県一九六一

森田誠一・立花三郎・猪飼隆明『熊本県の百年』 山川出版社一九八七

水野公寿『西南戦争と阿蘇』 一の宮町二〇〇〇

大分県総務部総務課編『大分県史』（近代編1） 大分県一九八四

『宮崎県史通史編近・現代1』 宮崎県二〇〇〇

増田隆策『西南戦争と警察』 託摩会一九九七

日本電信電話公舎九州電話通信局編『九州の電信電話百年史』 一九七一

田中信義『カナモジでつづる西南戦争―線難戦争電報録―』 一九八九

山口 茂『知られざる西南戦争』 鳥影社二〇〇一

共同研究者 史学科三年 荒尾裕治(文責)

〃 三年 村山圭司

〃 一年 田辺龍弥

〃 一年 内田友樹

(本稿は去る十一月二日に開催された別府大学史学研究会学生部会での発表原稿を手直ししたものです。)